

TATとロールシャッハ・テストに示された対象関係

山下京子

(2004年10月6日 受理)

Object relations in the TAT and the Rorschach Test

Kyoko YAMASHITA

Abstract

This study investigated the relationship between the results of the Thematic Apperception Test (TAT) and those of the Rorschach Test, using the Social Cognition and Object Relations Scale (SCORS) (Westen, 1991) and the Comprehensive System (Exner, 2001) to analyze respective results, in the same subject. The subjects of the study were 53 female college students without a history of psychiatric disorder, and the TAT and Rorschach tests were performed at roughly the same time. In the stepwise regression analyses for comparing variables in the Rorschach test and SCORS 4 scores in the TAT, performed using a study by Ackerman et al. (2001) as a reference, a significant correlation was detected between the two tests. It also became clear that the characteristics of the results of the Rorschach test were not always reflected on SCORS scores. This indicates that not only SCORS scores, but also content analysis, should be included in the analysis of TAT. This is a task for future study.

1 問題と目的

投影法検査の中で、TATは被験者のパーソナリティに関する豊富な臨床心理学的情報をもたらす検査として位置付けられているが、臨床現場で使用されることは、同じ投影法検査であるロールシャッハ・テスト（以下ロ・テストと略）に比べると格段に少ない。その理由として、鈴木（1997）は、ロ・テストでは反応の記号化が比較的容易で、その体系が存在するのに対して、TATではそこまで達していないことや、わが国におけるTAT研究では、ハーヴァード版の導入後数種類の日本版を作成することに多大な努力が払われたことを挙げている。確かに記号化や数量化などの処理の仕方がそぐわないところが、TAT反応にあるのは事実であろう。しかしながら、Westen（1991）の指摘するように、TATは、被験者が図版刺激について性格や関係を十分詳細に描写することで、被験者の親密な関係における対人間の機能に関連した認知的、情

緒・動機づけパターンを明らかにすることのできるテストであり、対象関係の査定にとっては特に優れたテストである。

TAT 反応の数量化を試みたものとして、SCORS (Westen et al., 1989) がある。SCORS は、TAT における対象関係の臨床的査定のために考案されたスケールであり、Westen ら (1989) では 4 次元の対象関係のそれぞれについて 5 段階評定を、Westen (1995) では 8 次元の対象関係のそれぞれについて 7 段階評定を求めるものに改訂されている。TAT に SCORS を利用した研究は少なくなく、例えば、Porcerelli ら (2001) は、精神病質の性殺人犯のケースに実施した TAT について、SCORS (Westen et al., 1989) と DMM (Cramer, 1991) を用いて、対象関係と防衛機制を分析している。DMM は、防衛機制 (否認、投影、同一化の 3 カテゴリー) について 7 水準に分類するものである。

同一被験者に対してロ・テストと TAT を実施した場合、それぞれのテストから得られた結果がどのように関連しているかについては、興味深いテーマであるが、このテーマを取り扱った研究はそれほど多くはない。Ackerman ら (2001) は、人格障害の患者 57 名に対して、TAT とロ・テストを実施し、TAT については SCORS (Westen, 1995) を、ロ・テストについては MOA (Urist, 1977) を用いて対象関係を評定し、両テストから査定された対象関係が相互に関連していることを報告している。Kelly (1997) もまた、青年期の被験者に対して、TAT とロ・テストを実施し、TAT については SCORS (Westen et al., 1989) を、ロ・テストには MOA を用いて、これら 2 つの対象表象尺度の有効性と妥当性を検討している。

そこで、本研究では、青年期の被験者を対象として、TAT とロ・テストを実施し、TAT については SCORS (Westen, 1991)、ロ・テストについては包括システム (Exner, 2001) を用いて、両検査の結果がどのように関連するかを対象関係を中心に検討することを目的とする。

2 方 法

被験者 心理学系専攻大学生女子 53 名を対象とした。

手続き 個別に TAT とロ・テストを実施した。両検査の実施時期は、ほぼ同時期であった。ロ・テストは、包括システム (Exner, 2001) による手続きに従い、TAT は、鈴木 (1997) の教示に従い実施された。TAT 図版は、本研究では、Murray (1943) にほぼ従い、次の 20 枚の図版を使用した。すなわち、1, 2, 3 BM, 4, 5, 6 GF, 7 GF, 8 BM, 9 GF, 10, 11, 12 F, 13 MF, 14, 15, 16, 17 GF, 18 GF, 19, 20 であった。ロ・テスト反応は、包括システムによるコーディングを行った。TAT 反応に関しては、図版 16 を除く 19 枚の図版について、SCORS (Westen, 1991) を用い、評点化した。すなわち、各図版の TAT 反応に対し、SCORS の 4 尺度、『人物表

象の複雑性』『関係パラダイムの感情調』『関係性と道德基準への情緒的投資能力』『社会的因果性の理解』のそれぞれについて5段階評定を行った。評定基準は、Westen (1991) と Kelly (1997) に従った。『人物表象の複雑性』は、自己と他者の見解を明確に定義し区別する程度を測定し、自己と他者の見解の区別が明確でないレベル1から、他者の感情状態、動機、態度、無意識的過程に言及し、明確に推論がなされるレベル5までの5段階で評定された。『関係パラダイムの感情調』は、個人が関係を安全、養育的、価値あるものとみなすか、対照的に破壊的、有害、脅威的とみなすかの程度を測定する尺度で、個人の内的世界を脅威的、危険、苦痛であるものとみなすレベル1から、決定的にポジティブな対象表象と対人関係期待を示すレベル5までの5段階で評定された。『関係性と道德基準への情緒的投資能力』では、他者との関係性がどの程度手段より目的として描写されているか、また欲求充足よりも相互性を強調しているかを測定し、自己の欲求満足に第1の関心があるレベル1から、自己と他者双方が幸福になる関係の発展に関心を持っているレベル5の反応まで、5段階で評定した。『社会的因果性の理解』は、原因帰属の論理や複雑さ、正確さを測定する尺度で、因果関係の感覚をひどく障害された反応のレベル1から、複雑な思考、感情、行為からなる反応のレベル5まで、5段階で評定した。

3 結 果

1) TAT 各図版における SCORS 得点の比較

TAT 図版16を除く、19枚の各図版について、被験者の SCORS の4尺度得点を基に平均値を求め、各尺度ごとに図示した。すなわち、『人物表象の複雑性』(以下『複雑性』と略)を図1、『関係パラダイムの感情調』(以下『感情調』と略)を図2、『関係性と道德基準への情緒的投資能力』(以下『情緒投資』と略)を図3、『社会的因果性の理解』(以下『因果性』と略)を図4に、各図版の平均値の高い順に並べて示した。『複雑性』尺度(図1)では、図版1、12Fが3.11と最も高く、図版19が1.36で最も低かった。図1を基に1要因分散分析を行ったところ、主効果が有意であった($F=22.743$, $df=18$, $p<.001$)。下位検定の結果、図版1、12Fは、図版8 BM以下の図版よりも有意に高く、図版13MF、7 GF、18GF、3 BMは、図版9 GF以下よりも有意に高かった。また、図版14、15、2、6 GF、8 BM、5は、図版10、11、19よりも有意に高く、図版20、4、17GF、9 GFは、図版11、19よりも、図版11は図版19よりも有意に高いことがわかった。次に、『感情調』尺度(図2)では、図版10の平均値が3.70で最も高く、図版3 BM、15の平均値が2.09で最も低くなっていた。図2を基に1要因分散分析を行ったところ、主効果が有意であった($F=15.506$, $df=18$, $p<.001$)。下位検定の結果、図版10の平均値が他の全ての図版よりも有意に高くなっていた。また、図版4は図版1以下よりも、図版6 GFは図版12F以下

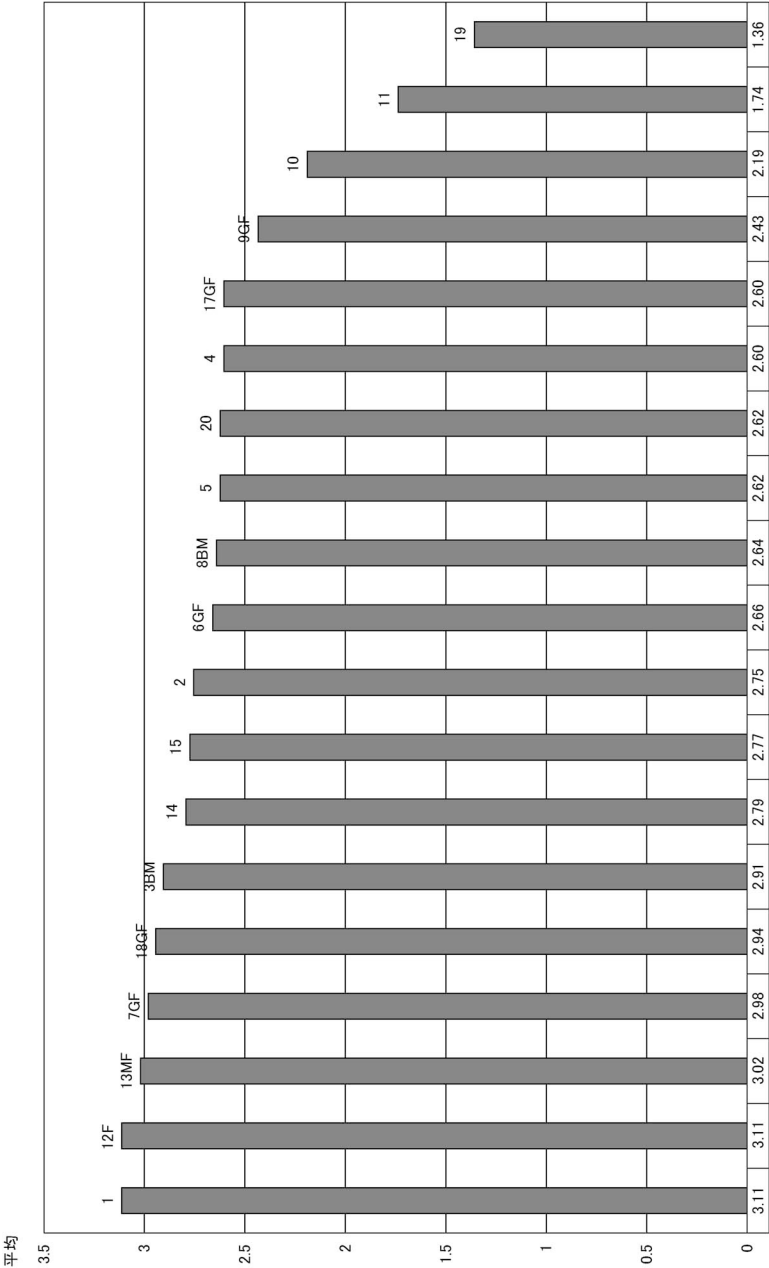


図 1 図版別の SCORS『複雑性』得点

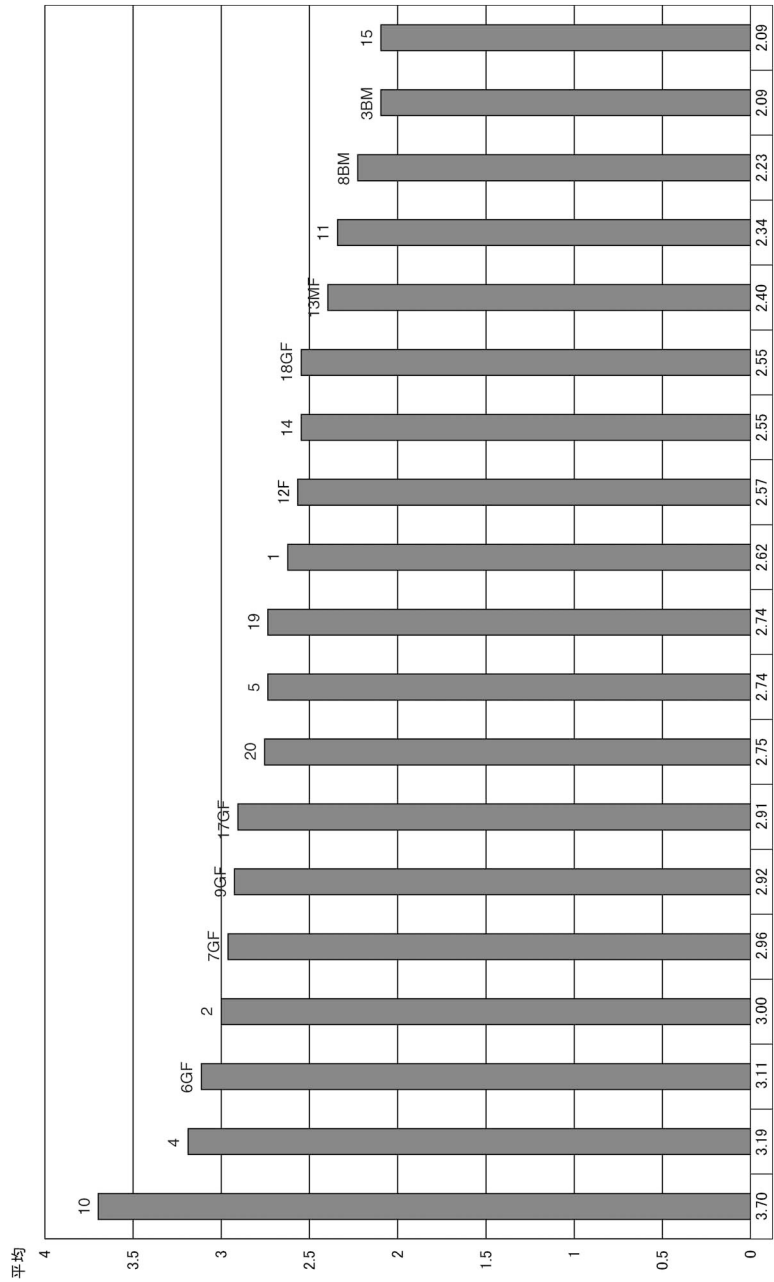


図 2 図版別の SCORS『感情調』得点

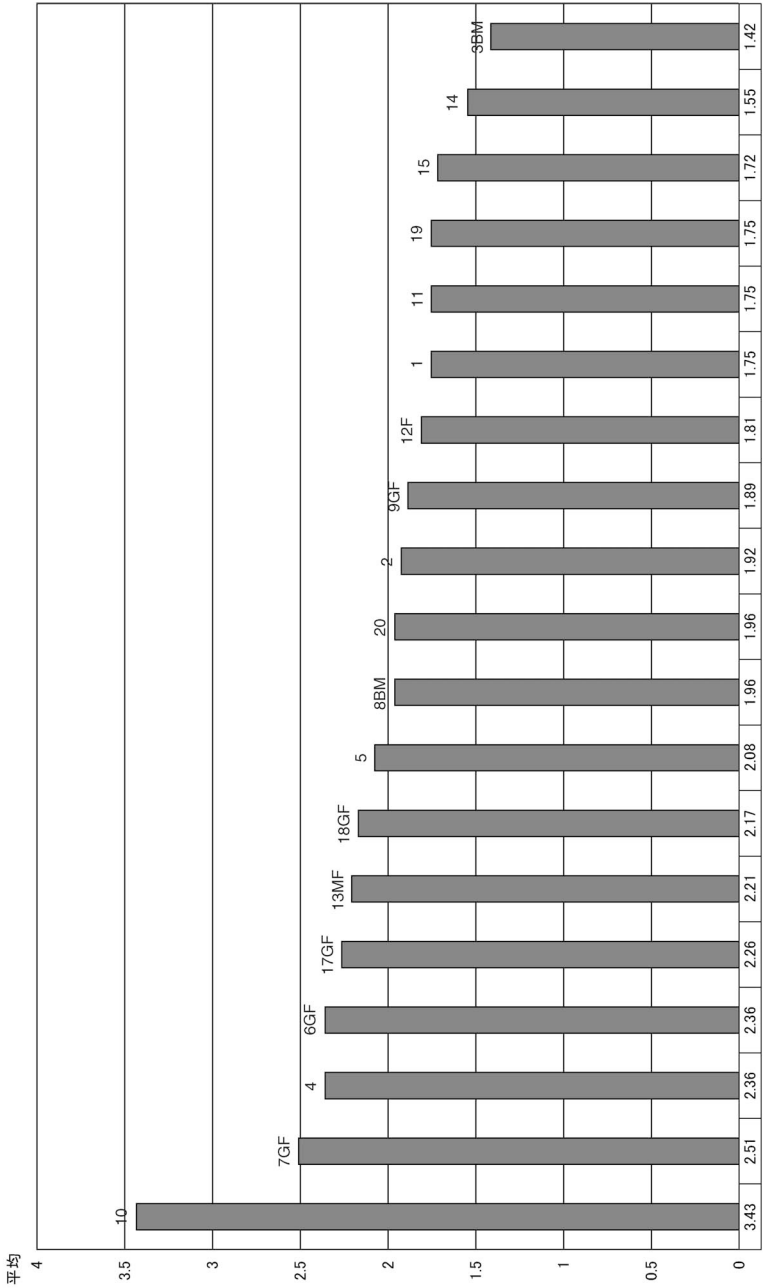


図 3 図版別の SCORS『情緒投資』得点

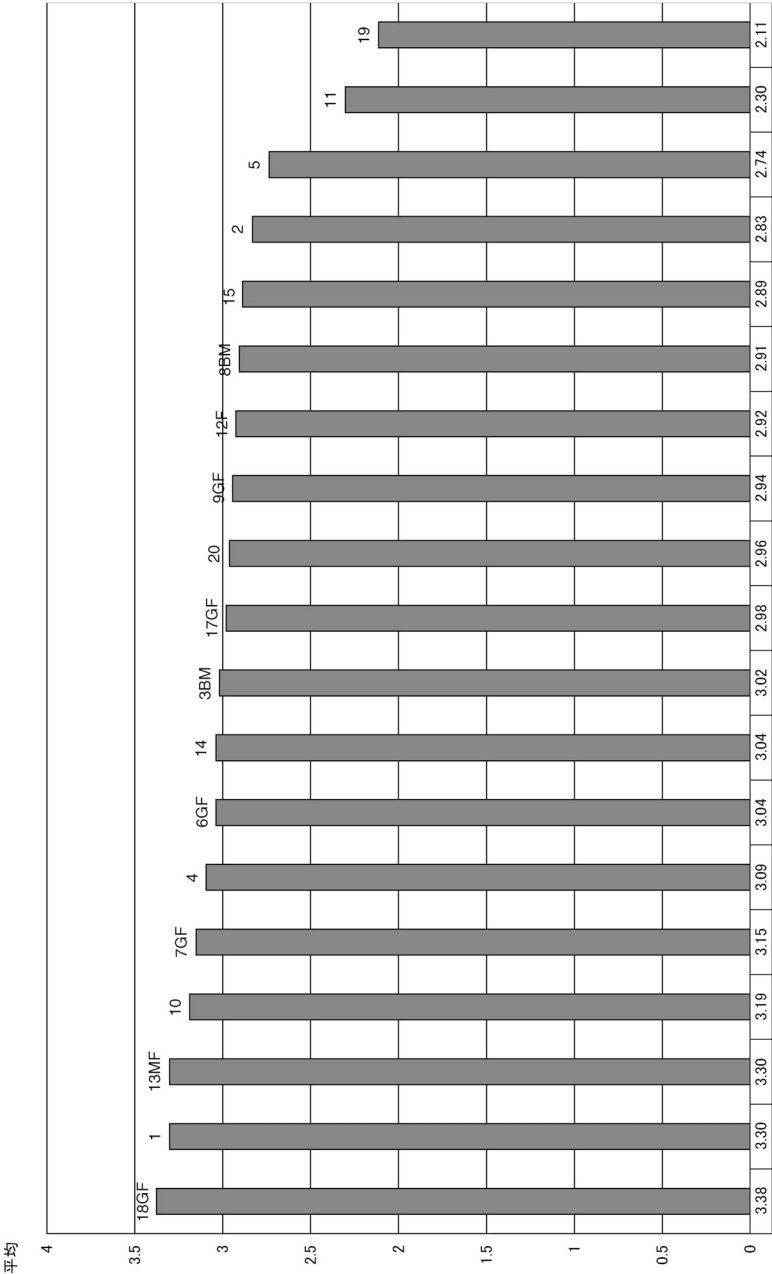


図 4 図版別の SCORS『因果性』得点

よりも有意に高く、図版 2, 7 GF, 9 GF, 17GF は、図版13MF 以下よりも有意に高かった。図版20, 5, 19は図版 8BM 以下よりも、図版 1 は図版 3 BM, 15よりも有意に高いこともわかった。

『情緒投資』尺度（図 3）では、図版10の平均値が3.43で最も高く、図版 3 BM の平均値が1.42で最も低かった。図 3 を基に 1 要因分散分析を行ったところ、主効果が有意であった（ $F=12.581$, $df=18$, $p<.001$ ）。下位検定の結果、図版10の平均値が他の全ての図版よりも有意に高かった。また、図版 7GF の平均値は 9GF 以下の図版よりも有意に高く、図版 4, 6 GF は図版15, 14, 3 BM より、図版17GF, 13MF, 18GF は図版14, 3 BM より、図版 5 は図版 3 BM よりも有意に高くなっていた。『因果性』尺度（図 4）では、図版18GF の平均値3.38が最も高く、図版19の平均値が2.11で最も低かった。図 4 を基に 1 要因分散分析を行ったところ、主効果が有意であった（ $F=8.937$, $df=18$, $p<.001$ ）。下位検定の結果、図版18GF の平均値は図版 2, 5, 11, 19よりも有意に高く、図版 1, 13MF は図版 5, 11, 19よりも有意に高かった。また、図版10から図版 5 までの各平均値は、図版11, 19よりも、図版11は図版19よりも有意に高くなっていた。

2) TAT 図版の選択と SCORS 得点

図版の選択は、次の 3 通りであった。①図版16を除く19枚の図版、②Ackerman ら（2001）に従い図版 1, 2, 3 BM, 4, 13MF の 5 枚、③Westen ら（1990）による図版 1, 2, 3 BM, 4, 13MF, 15, 18GF の 7 枚であった。この 3 通りの図版選択ごとに、SCORS 4 尺度のそれぞれの平均値を求め、表 1 に示した。また図版選択ごとに、SCORS 4 尺度間について Pearson の積率相関係数を求め、表 2-1, 2-2, 2-3 に示した。図版選択19枚では、表 2-1 に示されたように、『複雑性』と『感情調』間の相関が有意でなかった他は全て 1 %水準で有意な相関があった。図版選択 5 枚と 7 枚では、表 2-2, 2-3 に示されたように、『複雑性』と『情緒投資』の間に 5 %水準で有意な相関が、『複雑性』と『因果性』、『感情調』と『情緒投資』、『情緒投資』と『因果性』の間に 1 %水準で有意な相関が見られた。

3) 各被験者のロールシャッハ・テスト結果

各被験者のロ・テスト反応について、包括システムに従いコーディングを行ったものを基に、被験者ごとに構造一覧表を作成した。構造一覧表に示された各種変数のうち、主な変数と、対人知覚と自己知覚に関係するものを選択し、被験者別に表 3 に示した。表 3 に示されたように、体験型を見ると、被験者番号101～120の20名が不定型、被験者番号121～125の 5 名が外拡型、被験者番号126～153の28名が内向型であった。不定型の被験者のうちハイラムダ・スタイルは、被

表 1 図版選択別の SCORS 得点の平均値

SCORS	複雑性	感情調	情緒投資	因果性
図版19枚	2.625	2.708	2.052	2.952
図版 5 枚	2.879	2.664	1.943	3.106
図版 7 枚	2.876	2.574	1.964	3.113

表 2-1 図版19枚の SCORS 4 尺度間の相関
***p<.01

	複雑性	感情調	情緒投資	因果性
複雑性		0.218	0.405**	0.687**
感情調			0.608**	0.355**
情緒投資				0.632**

表 2-2 図版 5 枚の SCORS 4 尺度間の相関
*...p<.05, ***p<.01

	複雑性	感情調	情緒投資	因果性
複雑性		0.138	0.312*	0.556**
感情調			0.533**	0.266
情緒投資				0.543**

表 2-3 図版 7 枚の SCORS 4 尺度間の相関
*...p<.05, ***p<.01

	複雑性	感情調	情緒投資	因果性
複雑性		0.100	0.271*	0.623**
感情調			0.611**	0.234
情緒投資				0.539**

表 4-1 体験型別図版19枚の SCORS 得点の平均値 (SD)

	複雑性	感情調	情緒投資	因果性
不定型 (N=20)	50.25 (4.74)	51.35 (5.26)	39.55 (5.64)	57.05 (8.00)
外拡型 (N=5)	51.40 (3.93)	50.40 (3.61)	36.60 (4.92)	55.80 (3.60)
内向型 (N=28)	49.32 (6.33)	51.71 (7.15)	39.00 (7.96)	55.46 (9.69)

表 4-2 体験型別図版 5 枚の SCORS 得点の平均値 (SD)

	複雑性	感情調	情緒投資	因果性
不定型 (N=20)	14.80 (1.54)	13.65 (1.53)	10.05 (2.58)	15.85 (2.52)
外拡型 (N=5)	14.40 (1.02)	13.40 (1.96)	8.00 (1.67)	16.20 (2.48)
内向型 (N=28)	14.11 (2.27)	13.07 (1.58)	9.79 (2.46)	15.18 (2.92)

表 4-3 体験型別図版 7 枚の SCORS 得点の平均値 (SD)

	複雑性	感情調	情緒投資	因果性
不定型 (N=20)	20.50 (1.83)	18.30 (2.17)	13.95 (3.01)	22.15 (3.43)
外拡型 (N=5)	19.80 (1.17)	17.80 (2.56)	11.20 (2.04)	21.40 (2.15)
内向型 (N=28)	19.93 (3.04)	17.86 (2.63)	13.82 (3.15)	21.61 (3.89)

表3 被験者別ロ・テストの各種指標 (その1)

*...陽性

被験者	R	L	EB (左辺)	EB (右辺)	EA	EBper	S-CON	PTI	DEPI	CDI	HVI	OBS	GHR	PHR	Human	PureH
101	22	0.47	4	2.5	6.5	N	5	3	5*	5*	N	N	2	4	6	3
102	22	0.47	4	3.5	7.5	N	6	3	3	2	N	N	2	8	10	5
103	32	3.57	1	1	2	N	6	3	3	4*	YES	N	2	4	5	1
104	26	0.37	1	2	3	N	5	3	5*	5*	N	N	3	6	6	2
105	18	0.64	4	3	7	N	3	1	2	0	N	N	3	3	6	3
106	16	0.45	3	2	5	N	4	0	3	5*	N	N	3	3	6	2
107	21	0.50	3	2	5	N	5	3	6*	5*	N	N	2	2	2	0
108	22	0.38	4	4	8	N	5	2	6*	3	YES	N	5	5	8	3
109	16	1.29	4	2.5	6.5	N	4	1	4	3	YES	N	4	3	7	3
110	27	0.23	5	4.5	9.5	N	4	1	3	3	N	N	6	5	7	3
111	15	0.50	2	2.5	4.5	N	4	0	5*	5*	N	N	2	1	2	1
112	17	0.55	3	2.5	5.5	N	1	0	3	5*	N	N	3	2	4	3
113	25	0.56	3	2.5	5.5	N	3	1	5*	5*	N	N	6	2	6	4
114	34	1.27	3	4	7	N	4	2	5*	4*	N	N	7	2	4	3
115	17	0.70	2	2	4	N	4	0	3	4*	N	N	5	3	7	4
116	20	0.18	2	3	5	N	6	0	6*	5*	N	N	5	0	4	2
117	17	0.31	2	3	5	N	5	0	3	5*	N	N	2	0	2	1
118	23	0.28	5	3.5	8.5	N	6	1	5*	5*	YES	N	5	4	8	1
119	26	0.13	7	8	15	N	4	0	4	4*	N	N	8	3	11	5
120	19	0.58	4	2.5	6.5	N	3	0	2	0	N	N	3	1	4	4
121	28	0.33	3	6	9	2	7	0	4	4*	N	N	3	6	8	0
122	38	0.65	4	7.5	11.5	1.9	6	1	5*	4*	YES	N	5	5	4	1
123	24	1.18	0	2	2	2	6	0	5*	5*	N	N	5	2	5	1
124	25	0.92	1	3.5	4.5	3.5	4	1	7*	5*	N	N	4	3	5	3
125	24	1.18	2	4.5	6.5	2.3	2	0	3	1	N	N	6	2	8	4
126	32	0.52	13	4	17	3.3	6	4	5*	3	N	N	6	12	18	9
127	22	0.29	9	2	11	4.5	5	5	5*	4*	N	N	2	10	14	2
128	42	0.27	12	9	21	1.3	7	4	6*	4*	N	N	4	10	14	4
129	18	0.80	7	0.5	7.5	7	3	3	3	2	N	N	3	5	9	6
130	35	0.17	14	2	16	7	3	4	4	4*	N	N	3	18	15	4
131	22	0.16	14	4.5	18.5	3.1	5	3	4	1	N	N	6	11	16	6
132	25	0.92	5	1	6	5	5	3	4	4*	N	N	2	5	6	2
133	28	0.12	9	4	13	2.3	6	2	6*	4*	N	N	6	7	11	6
134	50	0.39	11	7	18	1.6	9*	3	7*	5*	N	N	6	12	17	9
135	38	0.41	14	7	21	2	5	3	5*	3	YES	N	9	10	17	9
136	43	0.19	19	9.5	28.5	2	4	3	6*	3	N	N	11	15	24	14
137	15	0.67	4	0.5	4.5	4	5	1	3	3	N	N	3	3	6	2
138	31	0.94	7	0.5	7.5	7	4	3	5*	3	N	N	5	5	10	5
139	34	0.55	5	3	8	1.7	5	3	6*	5*	YES	N	5	5	10	5
140	36	0.38	12	7	19	1.7	7	3	6*	2	N	N	9	9	12	5
141	25	2.13	6	1	7	6	4	3	4	3	YES	N	6	6	10	3
142	23	0.77	6	1.5	7.5	4	3	2	2	3	N	N	4	3	6	2
143	19	0.08	10	2.5	12.5	4	7	1	3	2	N	N	6	4	11	6
144	46	0.92	8	3.5	11.5	2.3	5	3	4	3	YES	N	8	6	14	5
145	18	0.29	4	1.5	5.5	2.7	4	0	4	5*	N	N	7	1	6	2
146	21	0.40	5	2.5	7.5	2	5	0	5*	5*	N	N	6	2	5	1
147	28	0.65	8	3	11	2.7	6	1	6*	3	YES	N	7	5	12	3
148	29	0.21	11	8	19	1.4	7	1	5*	2	N	N	11	6	15	8
149	21	0.24	7	1.5	8.5	4.7	5	2	6*	3	YES	N	7	5	9	4
150	21	0.62	6	3.5	9.5	1.7	5	1	4	3	YES	N	7	2	8	4
151	31	0.82	4	2	6	2	5	0	3	4*	N	N	6	0	4	4
152	23	1.30	4	0.5	4.5	4	3	2	3	4*	N	N	4	3	5	2
153	21	0.91	4	1	5	4	2	0	4	3	N	N	8	1	7	3

表3 被験者別ロ・テストの各種指標（その2）

被験者	a	p	COP	AG	sumT	Food	afrection	MOR	WDA%	X-%	P	isol index	3r+2/R	Fr+rF
101	3	6	1	0	3	3	0.38	3	0.63	0.41	3	0.19	0.32	0
102	2	4	2	0	6	0	0.47	0	0.71	0.45	3	0.14	0.27	0
103	2	3	0	0	0	0	0.39	0	0.65	0.50	3	0.03	0.38	0
104	3	10	0	0	0	0	0.44	0	0.54	0.50	6	0.27	0.42	1
105	4	5	0	3	1	0	0.50	1	0.72	0.28	4	0.00	0.61	0
106	2	5	0	0	1	0	0.23	1	0.80	0.25	4	0.31	0.19	0
107	3	5	0	0	1	0	0.40	3	0.67	0.33	4	0.29	0.24	0
108	3	4	0	0	0	2	0.22	0	0.76	0.41	4	0.14	0.18	0
109	4	3	1	1	0	1	0.46	3	0.77	0.31	4	0.11	0.56	0
110	9	8	0	0	1	1	0.80	2	0.91	0.19	7	0.11	0.63	1
111	3	2	1	0	1	1	0.36	1	0.87	0.13	4	0.13	0.27	0
112	2	6	1	0	0	2	0.42	0	0.75	0.29	3	0.18	0.41	0
113	2	5	0	0	2	0	0.25	3	0.81	0.32	5	0.28	0.44	1
114	2	3	0	0	2	0	0.42	2	0.69	0.38	8	0.15	0.53	0
115	3	3	1	0	1	0	0.42	0	0.81	0.24	4	0.35	0.71	2
116	0	17	0	0	2	0	0.25	1	0.89	0.15	6	0.05	0.30	0
117	2	9	0	0	2	0	0.42	1	0.71	0.29	5	0.00	0.29	1
118	4	10	0	0	0	0	0.21	1	0.77	0.26	8	0.30	0.22	0
119	7	10	0	1	1	0	0.30	0	0.92	0.15	5	0.35	0.19	0
120	2	2	2	0	1	0	0.46	0	0.88	0.16	5	0.11	0.53	1
121	4	6	0	0	2	0	0.47	2	0.76	0.25	4	0.11	0.21	0
122	6	10	0	0	0	2	0.27	3	0.70	0.26	4	0.13	0.18	0
123	1	1	0	0	0	0	0.33	0	0.74	0.29	6	0.29	0.21	0
124	2	4	0	1	1	1	0.39	1	0.76	0.36	4	0.20	0.32	0
125	2	3	0	1	1	0	0.60	0	0.81	0.21	4	0.19	0.50	0
126	8	10	3	1	3	0	0.28	4	0.52	0.56	4	0.19	0.38	0
127	2	11	1	0	2	0	0.29	2	0.37	0.64	1	0.05	0.45	0
128	5	23	0	0	2	3	0.40	17	0.60	0.48	5	0.19	0.33	1
129	2	7	3	1	0	0	0.50	2	0.69	0.39	5	0.06	0.56	0
130	15	17	0	4	2	0	0.21	2	0.33	0.71	5	0.23	0.43	0
131	9	11	2	2	1	0	0.57	1	0.65	0.41	5	0.18	0.55	0
132	2	7	0	0	2	1	0.19	4	0.54	0.48	4	0.12	0.20	0
133	6	13	3	0	1	0	0.33	2	0.78	0.32	5	0.43	0.32	1
134	3	17	0	0	2	3	0.22	5	0.52	0.54	2	0.26	0.28	0
135	9	12	0	0	0	0	0.27	1	0.59	0.50	4	0.18	0.39	1
136	14	23	1	2	2	1	0.34	7	0.61	0.44	8	0.12	0.37	1
137	3	5	2	0	0	0	0.50	0	0.73	0.27	3	0.07	0.47	0
138	2	12	1	0	1	0	0.55	3	0.63	0.52	7	0.10	0.32	0
139	1	9	1	1	0	0	0.42	3	0.62	0.47	6	0.19	0.35	1
140	13	12	1	2	2	0	0.38	3	0.63	0.39	4	0.36	0.53	2
141	2	5	0	1	0	0	0.25	0	0.71	0.36	4	0.04	0.48	0
142	3	7	2	0	1	1	0.28	2	0.76	0.39	5	0.04	0.35	0
143	5	14	3	1	2	0	0.46	2	0.82	0.26	5	0.11	0.53	0
144	7	10	2	0	0	2	0.15	0	0.69	0.39	5	0.17	0.24	0
145	3	10	0	0	0	1	0.20	0	0.94	0.11	6	0.28	0.44	0
146	6	5	0	0	2	0	0.31	2	0.80	0.19	4	0.48	0.33	0
147	0	10	0	0	0	0	0.40	1	0.74	0.32	5	0.21	0.18	0
148	9	9	1	2	1	1	0.38	4	0.74	0.28	9	0.31	0.48	1
149	3	8	1	0	0	0	0.24	0	0.76	0.33	5	0.05	0.48	0
150	4	7	1	1	0	0	0.24	4	0.76	0.24	6	0.10	0.38	0
151	7	7	1	0	2	0	0.55	1	0.86	0.19	5	0.03	0.45	0
152	2	7	0	0	1	0	0.44	0	0.79	0.35	6	0.04	0.35	0
153	4	2	0	0	0	0	0.31	0	1.00	0.00	6	0.19	0.43	0

験者番号103, 109, 114の3名, 外拡型でハイラムダ・スタイルは被験者番号123, 125の2名, 内向型でハイラムダ・スタイルは, 被験者番号141, 152の2名であった。S-CON (自殺の可能性) で8以上は被験者番号134の1名であった。PTI (知覚と思考の指標) > 3 は被験者番号126, 127, 128, 130の4名, DEPI (抑うつ指標) 5以上は26名, CDI (対処力不全指標) 4以上は29名, HVI (警戒心過剰指標) に該当する被験者は12名であった。OBS (強迫の様式指標) に該当する者はいなかった。

4) 体験型による SCORS 得点の比較

ロ・テストにおける体験型の違いによる, TAT の SCORS 得点の差を検討するために, 各体験型の SCORS 4 尺度について, TAT 図版選択19枚, 5枚, 7枚の3通りで比較した。表4-1, 4-2, 4-3 に, TAT 図版選択ごとに, 体験型別の SCORS 得点の平均値 (SD) を示した。体験型 (不定型・内向型・外拡型) \times SCORS (複雑性・感情調・情緒投資・因果性) の2要因分散分析を行ったところ, 3通りのTAT図版選択全てにおいて, SCORSの主効果のみ有意であり, 体験型による SCORS 得点の差は見られなかった。

5) ロ・テストの各種変数と SCORS 4 尺度の関係

Ackerman ら (2001) を参考にして, TAT 図版選択の3通りにおける SCORS 尺度『複雑性』『感情調』『情緒投資』『因果性』のそれぞれについて基準変数として, ロ・テスト各種変数を予測変数として, ステップワイズ法を用いた回帰分析を行った ($N=53$)。有意水準は全て5%とした。

TAT 図版選択19枚では, 『複雑性』については, AG が有意に正の関係を示した ($R=.271$, $R^2=.073$; $F(1, 51)=4.037$)。『感情調』では, MOR (ステップ1, $SRC=-.535$) と L (ステップ2, $SRC=-.337$) の両方が有意に関係していた ($R=.568$, $R^2=.323$; $F(2, 50)=11.916$)。また『情緒投資』については, a ($R=.273$, $R^2=.075$; $F(1, 51)=4.105$) が, 『因果性』についても a ($R=.342$, $R^2=.117$; $F(1, 51)=6.761$) が有意な正の関係を示した。

TAT 図版選択5枚では, 『複雑性』について, COP (ステップ1, $SRC=-.415$) と L (ステップ2, $SRC=-.259$) が有意に関係していた ($R=.450$, $R^2=.202$; $F(2, 50)=6.338$)。また, 『感情調』については, MOR (ステップ1, $SRC=-.413$) と SumT (ステップ2, $SRC=.268$) の両方が有意であった ($R=.430$, $R^2=.185$; $F(2, 50)=5.663$)。『情緒投資』では, Isol Index ($R=.289$, $R^2=.083$; $F(1, 51)=4.640$) が, 『因果性』では a ($R=.326$, $R^2=.106$; $F(1, 51)=6.057$) が有意な正の関係を示した。

TAT 図版選択7枚では, 『複雑性』については, COP (ステップ1, $SRC=-.395$) と L (ス

テップ 2, SRC = $-.304$) の両方が, 有意に関係していた ($R = .456$, $R^2 = .208$; $F(2, 50) = 6.550$)。また, 『感情調』については, MOR (負の関係; $R = .477$, $R^2 = .227$; $F(1, 51) = 15.007$) が, 『情緒投資』では Afr (正の関係; $R = .282$, $R^2 = .079$; $F(1, 51) = 4.399$) が, 『因果性』では a (正の関係; $R = .331$, $R^2 = .110$; $F(1, 51) = 6.272$) が有意に関係していた。

次に, TAT 図版選択別に, SCORS 4 尺度とロ・テスト各変数との間の Pearson の積率相関係数を求め, 有意であったものを表 5 に示した。表 5 に示されたように, TAT 図版選択 19 枚では, 『複雑性』と AG が正の相関, 『感情調』と MOR に負の相関, 『情緒投資』と a に正の相関, 『因果性』と a, AG のそれぞれに正の相関, 『因果性』と L に負の相関が見られた。TAT 図版選択 5 枚では, 『複雑性』と COP に負の相関, 『複雑性』と EB (右辺) に正の相関, 『感情調』と MOR に負の相関, 『情緒投資』と Isol Index に正の相関が見られた。また, 『因果性』と a, AG, EB (右辺) のそれぞれの間に正の相関, 『因果性』と L に負の相関が見られた。TAT 図版選択 7 枚では, 『複雑性』と COP に負の相関, 『複雑性』と EB (右辺) に正の相関, 『感情調』と MOR, p のそれぞれに負の相関, 『情緒投資』と Isol Index に正の相関, 『情緒投資』と Afr. に負の相関, 『因果性』と a, AG それぞれに正の相関, 『因果性』と L に負の相関が見られた。

表 5 SCORS 尺度とロ・テスト指標間の有意な相関係数 ***$p < .05$, **$p < .01$			
SCORS	TAT 19 枚	TAT 5 枚	TAT 7 枚
複雑性	AG (.271*)	COP ($-.370^{**}$) EB (右辺) (.286*)	COP ($-.343^{*}$) EB (右辺) (.303*)
感情調	MOR ($-.463^{**}$)	MOR ($-.343^{*}$)	MOR ($-.477^{**}$) p ($-.298^{*}$)
情緒投資	a (.273*)	Isol Index (.289*)	Isol Index (.273*) Afr. ($-.282^{*}$)
因果性	a (.342*) L ($-.301^{*}$) AG (.289*)	a (.326*) L ($-.290^{*}$) AG (.285*) EB (右辺) (.326*)	a (.331*) L ($-.298^{*}$) AG (.318*)

6) 事例におけるロ・テストの各種変数と SCORS 4 尺度の関係

事例① (被験者番号 134) 事例①は, S-CON = 9 で, 被験者の中で唯一 S-CON 陽性であった。表 3 に示されたように, 事例①のロ・テストの各種変数のうち, 特殊指標は, DEPI = 7*, CDI = 5* が陽性で, DEPI の項目を検討したところ, うつの程度は, 感情 (重度 4), 認知 (重度 5), 対人関係 (重度 2), 心理的複雑さ (重度 0) となっていた。事例 134 のロ・テストの特徴としては, $R = 50$ と多く, EB = 11:7.0 で体験型は内向型, AdjD < 0, $p > a + 1$ に該当し, $C' = 14$ であった。対人知覚に関する変数では, COP = 0, AG = 0, GHR:PHR = 6:12, Food = 3 が, 自

己知覚に関する変数では、FD=4, MOR=5が特徴的であった。事例①のTATのSCORS得点は、①TAT 図版選択19枚の場合：『複雑性』47, 『感情調』55, 『情緒投資』43, 『因果性』55, ②TAT 図版選択5枚の場合：『複雑性』15, 『感情調』13, 『情緒投資』10, 『因果性』17, ③TAT 図版選択7枚の場合：『複雑性』21, 『感情調』19, 『情緒投資』15, 『因果性』22であった。表4-1～4-3に示された体体験型別のSCORS得点と比較すると、特に平均値から逸脱した値は無かった。また、表5に示されたように、SCORS尺度とロ・テスト各変数間の相関のうち、『感情調』とMORとの間に有意な負の相関が見られたが、事例①の『感情調』の平均得点は内向型の平均値と比較して同じかそれ以上あったがMOR=5であり、ロ・テスト上で示された悲観性はSCORS得点には反映されなかった。そこで、TATの内容分析を行ったところ、希薄な親子関係がテーマになっていた。例えば、実の父親と知らずに上司と部下と言う関係が続く娘（図版6GF）、母親と一緒にいたい夢が実現しない少女（図版7GF）、手術の成功にもかかわらず死んだ父親と医師を目指す息子（図版8BM）、行き倒れの男性が母親の腕に抱かれるが、母とは知らずに息を引き取る（図版18GF）などに示されるように、親子が愛情の絆で結ばれることの困難性が物語られていた。それは、図版19で「煙突のある小さな家」の物語を作ろうと試みて、作話を中断しているように、家庭的な温かさを具体的にイメージできないことにも示されていた。

事例②（被験者番号103） 事例②は、表3に示されたように、EB=1:1.0, L=3.57で不定型の回避型であった。特殊指標は、CDI=4*, HVI陽性であり、AdjD<0に該当していた。対人知覚に関する変数では、COP=0, AG=0, GHR:PHR=2:4が特徴的であった。事例②のTATのSCORS得点は、①TAT 図版選択19枚の場合：『複雑性』46, 『感情調』43, 『情緒投資』33, 『因果性』50, ②TAT 図版選択5枚の場合：『複雑性』14, 『感情調』14, 『情緒投資』9, 『因果性』13, ③TAT 図版選択7枚の場合：『複雑性』19, 『感情調』17, 『情緒投資』14, 『因果性』19であった。表4-1～4-3に示された不定型のSCORS平均値と比較すると、図版選択19枚では、『複雑性』『感情調』『情緒投資』『因果性』の全てにおいて、低くなっていた。また、『因果性』については、どの図版選択においても平均値よりも低く、表5に示されたLと『因果性』との間の負の相関を裏付けていた。事例②のTAT反応を見ると、短い反応が多く、例えば、図版2では、散歩に来て田植えをしている人たちの様子を見ているという単純な物語であった。その一方で、図版18GF, 19, 20では、長い物語が語られ、夜遊びに出かけようとする娘と母親の諍い（図版18GF）、怪物の襲撃（図版19）、大惨事になった花火大会（図版20）で、周囲では悲惨な状況が繰り返されるが、主人公には被害がないという物語が繰り返された。

事例③（被験者番号122） ロ・テストの結果から、外拡型は5名であり、事例③はその中の1例であった。表3に示されたように、事例③の特殊指標ではDEPI=5*, CDI=4*, HVI陽性

であった。DEPIの項目を検討したところ、うつ程度は感情（重度1）、認知（重度3）、対人関係（重度1）であった。対人知覚に関する変数では、COP=0, AG=0, GHR:PHR=5:5, a:p=6:10, Food=2, 自己知覚に関する変数では、MOR=3が特徴的であった。事例③のTATのSCORS得点は、①TAT 図版選択19枚の場合：『複雑性』53, 『感情調』53, 『情緒投資』44, 『因果性』60, ②TAT 図版選択5枚の場合：『複雑性』16, 『感情調』13, 『情緒投資』8, 『因果性』19, ③TAT 図版選択7枚の場合：『複雑性』21, 『感情調』17, 『情緒投資』12, 『因果性』24であった。表4-1～4-3に示された外拡型のSCORS平均値と比較すると、図版選択19枚では4つのSCORS平均値よりも高く、図版選択5枚と7枚では、『因果性』で平均値よりも高かった。事例③のTAT反応を見ると、例えば図版3GFでは、過労で体調を崩した女性が休暇を取り旅に出て生き方を考え、その後誰からも羨ましがられる人生を歩むという物語、図版18GFでは殺人未遂を犯した女性が刑期を終えて出てくると、昔好きだった男性が彼女のことをずっと待っていてくれたという物語が特徴的であった。

事例④（被験者番号141） 事例④は、表3に示されたように、EB=6:1.0, EBPer=6.0で超内向型であり、L=2.13の回避型で、特殊指標はHVI陽性であった。対人知覚に関する変数では、COP=0, AG=1, GHR:PHR=6:6, a:p=2:5, 自己知覚に関する変数では、 $3r+(2)/R=0.48$ が特徴的であった。事例④のTATのSCORS得点は、①TAT 図版選択19枚の場合：『複雑性』40, 『感情調』48, 『情緒投資』32, 『因果性』41, ②TAT 図版選択5枚の場合：『複雑性』11, 『感情調』12, 『情緒投資』9, 『因果性』13, ③TAT 図版選択7枚の場合：『複雑性』15, 『感情調』17, 『情緒投資』14, 『因果性』18であった。表4-1～4-3の内向型の平均値と比較すると、図版選択19枚では、全ての尺度において平均値よりも低く、図版選択5枚と7枚では、『複雑性』と『因果性』で、平均値よりも低かった。事例④のTAT反応を見ると、短い反応が多く、図版3BMでは、女性が気分が悪くなりその場に座り込んでしまったという簡単な場面描写で終わっていた。場面描写のみで終わる反応は、図版19においても見られた。

4 考 察

1) SCORS得点から見たTAT図版による差

Westen (1991)によると、『複雑性』尺度は、被験者が自己と他者の視点を明確に区別する程度を測定している。すなわち、自己と他者が安定した永続する多次元的性質を持っているものとみなしているか、また自己と他者を複雑な動機と主観的体験を持つ心理学的存在としてみなしているかの程度を測定している。図1に示されたように、『複雑性』得点では、図版1, 12Fが最も高く、図版19が最も低かったが、図版中に描かれた人物が一人または複数であっても対

比しやすい場合、自己と他者の視点は明確になり、図版19や11のように図版に人物像が描かれない場合や、不明瞭な刺激の場合には、物語に人物を導入しにくく、このことが自他の視点を不明瞭にしたと考えられる。

『感情調』得点では、図版10が最も高く、図版3 BM, 15で最も低くなっていた(図2参照)。Westen (1991)によれば『感情調』尺度は、人物表象と関係の感情的特質を測定するものであり、世界をどの程度悪意のあるもの、または苦痛なものと予期しているか、それとも根本的に親切で豊かなものとして社会的相互作用を見ているかの程度を測定している。鈴木(1997)は、図版10における物語づくりの前提は、二人の人物間に相互的な信頼や愛情を認めることであると指摘しているが、図版10の『感情調』得点が高かったことは、このことを裏付けていた。図版10は、『情緒投資』得点においても、他の図版に比べ、最も高かった(図3参照)。一方、最も低いのは、図版3 BMであった。『情緒投資』尺度は、Westen (1991)によると、他者が手段よりも目的として扱われているか、出来事を欲求満足以外の関係で描写しているか、道徳基準が発達し考慮されているかの程度を測定している。鈴木によれば、図版3 BMの反応のほとんどは、精神的要因による脱力状態か身体的要因による脱力状態のどちらかに分類され、このことから低い『情緒投資』得点を説明できると考えられる。

『因果性』尺度は、Westen (1991)によると、人物の行為、思考、感情の原因帰属がどの程度論理的で、正確で、複雑であるかや、心理学的に意識されるかを測定する。『因果性』得点では、図版19, 11が他の図版に比べて低くなっていた(図4参照)。両図版とも人物像が描かれていず、物語作りの難しい図版であることが関係していると考えられる。

4つのSCORS尺度における図版による差は、TAT図版に質的な差があることを裏付けるものであった。このことは、TAT図版の選択に関して、どの図版を選ぶかということが問題になることを意味している。本研究では、Murray (1943)に従い、20枚の図版を選択し検査を実施したが、分析では図版16を除外した19枚、図版1, 2, 3 BM, 4, 13MFの5枚、これに図版15, 18GFを加えた7枚の3通りを採用した。TAT図版に質的な差があるということは、図版を選択する場合にどの図版を選択するかを検討しなければならないだけでなく、果たして全図版を実施する必要があるのかということも問題になってくるだろう。そのためには、各図版の質的な差の詳細が明らかにされねばならず、今後の検討課題である。

SCORS 4尺度間の相関では、図版選択19枚で『感情調』と『複雑性』の間に有意な相関は無く、図版選択5枚と7枚では、『感情調』は『情緒投資』のみと有意な相関が見られた。Westen (1991)は、『感情調』尺度が他の尺度とは異なり、加齢に伴い発達する次元を査定していないと述べており、このことが他の尺度とは異なる相関のあり方を示したと考えられる。

2) ロ・テストに示された被験者群の特徴

体験型は、内向型が最も多く28名であり、次に不定型20名で、外拡型は最も少なく5名であった。日本人の健常成人の分布と比較すると、高橋ら（1998）によれば、内向型37%、外拡型15%、不定型47%であり、本研究の被験者群では内向型の多いことが特徴的であった。またハイラムダ・スタイルは内向型のうち2名、不定型に3名、外拡型に2名いた。特殊指標のうちDEPIとCDIで陽性になるものが被験者群の半数を超えており、ノーマル・データとしては非常に偏りのあるものであったと考えられる。

3) ロ・テストとTATの関係

ロ・テストの結果に基づく体験型により、TATのSCORS各尺度得点の差が見られるかを検討したところ、体験型による差は無かった。しかしながら、外拡型の人数が他の体験型に比べ少なかったこと、また同じ体験型でも、ハイラムダ・スタイルや各種の特殊指標で陽性のものが混在していることなどを考慮すれば、体験型によるSCORSの差はないと断定することはできない。各体験型の被験者数を増やし、ハイラムダ・スタイルや特殊指標陽性の被験者を除外した上で、再検討する必要があると考えられる。

ロ・テストの各種変数とSCORS4尺度の関係については、回帰分析と相関を求めたが、ほぼ同様の結果であった。『複雑性』については、ロ・テストでAGの大きい人が、TAT図版選択19枚で自己と他者の視点を明確に区別していた。またCOPとLが大きい人が、図版選択5枚と7枚で、自己と他者の視点は未分化であった。AG（攻撃的運動）とCOP（協力的運動）は、Exner（2000）によると、自己の表象として、対人関係における被験者の内的構えについて有益な情報をもたらしてくれるものであり、COPは対人交流に対する肯定的な見方、AGは攻撃的、競合的な見方を反映している。また、Exnerによると、Lは記録中の純粹形態反応の割合であり、刺激を単純かつ経済的なレベルで扱おうとする、あまり洗練されていない処理方法である。したがって、対人交流を攻撃的、競合的に見る人は、自己と他者の視点を明確に区別し、協力的な対人交流を見る人で、刺激を単純化させる処理方法を取る人は、自他の未分化を示すことが示唆された。

『感情調』については、ロ・テストでMORとLの大きい人（図版選択19枚）、MORが大きくSumTが小さい人（図版選択5枚）、MORの大きい人（図版選択7枚）が、世界を悪意のある、または苦痛のもとと見ていた。MOR（不快な内容）反応が多い人は、Exner（2000）によると、否定的な自己イメージがあり、自己を悲観的に見たり、悲観的な構えが目立つ思考を行うと考えられている。また、SumTについては、親密さへの欲求と関係していると言われている。したがって否定的な自己イメージや悲観的な思考を持ち、単純な刺激処理をする人や、親密な対人

関係で用心深い人が、世界を悪意のある、苦痛なもののみなしていると考えることができる。

『情緒投資』については、ロ・テストでaの大きい人（図版選択19枚）、Isol Indexの大きい人（図版選択5枚）、Afr.の大きい人（図版選択7枚）が、他者を手段よりも目的として扱い、出来事を欲求満足以外の関係で描写し、道徳基準を考慮していた。a(能動的反応)は、Exner(2000)によると、p(受動的反応)との比率で解釈されるものであり、差が大きくなるほど思考の構えや価値観に柔軟性無く、pがaよりも大きくなるほど対人関係で受動的な役割を取りやすいと考えられる。ただし、aそれ自体と実際の能動的行動との間に相関関係は確認されていない、Exnerはその理由として運動反応の大半が能動的であることを挙げている。しかしながら、aの反応を多く出すと言うことは、それだけ関係性に能動的な運動を投影することが多いということであり、被験者が関係性に対する積極的な態度や姿勢を持っていることを示唆しているのではないかと推察される。またExnerによれば、Isol Index（孤立指標）は大きいほど社会的交流に関心が無く、孤立していることを示し、Afr.（感情の比率）は、感情刺激への関心と関係していた。これらのことから、積極的な態度を持っている人や、社会的交流に巻き込まれることのない人、感情的なやりとりに関心のある人は、自己と他者の関係を相互的なものとして捉え、道徳も発達していると考えられる。『因果性』については、図版選択による違いは無く、ロ・テストでaの大きい人が、論理的、正確で複雑な原因帰属をしていた。このことは、積極的な態度・姿勢を持つ人が、適切な原因帰属を行うことを意味すると推測される。

4) 事例に見るロ・テストとTATの関係と今後の課題

事例①～④は、ロ・テストでいずれかの特殊指標が陽性になった被験者であった。事例①は被験者の中で唯一S-CON陽性という際立った特徴を持っていたが、TATのSCORS得点にはその特徴は反映されず、TAT反応の内容を分析して、ロ・テストの特徴と関連する対象関係の特徴を明らかにすることができた。事例③は外拡型であり、DEPI, CDI, HVIが陽性であったが、その特徴はSCORS得点から予想される対象関係とは関連性が見出せず、TAT反応の内容を見ると、苦痛な状況にいる主人公が、偶然的に状況から脱出できるというテーマに関連しているのではないかと考えられた。事例②, ④は、それぞれ回避-不定型、回避-内向型であり、ロ・テストの特徴はSCORSに反映されており、SCORSの有効性が示唆された。しかしながら、TAT反応の内容も考慮に入れると、さらに両検査の関連を推測することができた。例えば、事例②は回避-不定型で、CDI（対処力不全指標）とHVI（警戒心過剰指標）が陽性であったが、その特徴は、TAT反応で短い物語と長い物語が見られたこと、悲惨な状況にしながら主人公は被害を受けないと言う繰り返されるテーマに表れていた。

本研究では、TATについてSCORSを用い、TATにおける被験者の対象関係のパターンを明

らかにし、ロ・テストの各種変数との関連の検討を試みたが、両検査で被験者の持つ対象関係の特徴を明らかにするためには、TATの内容分析も含む必要性があることが示された。特に、事例ごとにロ・テストとTATの結果を比較検討し、事例を積み上げていくことが重要であると考えられ、今後の研究課題として残された。またその際に、TATの図版をどのように選択するかを検討しなくてはならず、この点についても今後の課題である。

5 文 献

- Ackerman, S. J., Hilsenroth, M. J., Clemence, A. J., Weatherill, R., and Fowler, J. C. 2001 Convergent validity of Rorschach and TAT scales of object relations. *Journal of Personality Assessment*, **77** (2), 295–306.
- Cramer, P. 1991 The development of defence mechanisms: Theory, research, and assessment. New York: Springer-Verlag.
- Exner, J. E. Jr. 2000 A Primer For Rorschach Interpretation. Rorschach Workshops, Asheville, North Carolina. (中村紀子・野田昌道監訳 2002 ロールシャッハの解釈 金剛出版)
- Exner, J. E. Jr. 2001 A Rorschach Workbook for the Comprehensive System. Rorschach Workshops, Asheville, North Carolina.
- Kelly, F. D. 1997 The Assessment of Object Relations Phenomena in Adolescents TAT and Rorschach Measures. Lawrence Erlbaum Associates, Publishers. Mahwah, New Jersey.
- Murray, H. A. 1943 Thematic Apperception Test manual. Cambridge: Harvard University Press.
- Porcerelli, J. H., Abramsky, M. F., Hibbard, S., and Kamoo, R. 2001 Object relations and defense mechanisms of a psychopathic serial sexual homicide perpetrator : a TAT analysis, *Journal of Personality Assessment*, **77** (1), 87–104.
- 鈴木睦夫 1997 TATの世界—物語分析の実際 誠信書房
- 高橋雅春・高橋依子・西尾博行 1998 包括システムによるロールシャッハ解釈入門 金剛出版
- Urist, J. 1977 The Rorschach test and the assessment of object relations. *Journal of Personality Assessment*, **41**, 3–9.
- Westen, D., Lohr, N., Silk, K., and Kerber, K. 1989 Measuring object relations and social cognition using the TAT: A scoring manual. Unpublished manuscript, University of Michigan, Ann Arbor.
- Westen, D. 1991 Clinical assessment of object relations using the TAT. *Journal of Personality Assessment*, **56** (1), 56–74.
- Westen, D. 1995 Social Cognition and Object Relations scale: Q-sort for projective stories (SCORS-Q). Unpublished manuscript, Cambridge Hospital and Harvard Medical School, Cambridge, MA.
- Westen, D., Lohr, N., Silk, K. R., Gold, L., and Kerber, K. 1990 Object relations and social cognition in borderlines, major depressives, and normals: a Thematic Apperception Test analysis. *A Journal of Consulting Clinical Psychology*, **2** (4), 355–364.